

チャプター01 プロローグ

目が覚めると私は見知らぬ部屋にいました。
窓からは高層ビルが立ち並んでいるのが見えます。
ベッドサイドには読書用のライトが両側にあり、二人掛けのソファと仕事用のデスクもあります。
どうやらどこかのホテルの一室のようです。
薄手のブランケットを被っているけど、自分が全裸であることに気がきます。
ごそごそと起き上がろうとした瞬間、体に妙な違和感を覚えました。
胸がやたらと重く、乳首がシーツに擦れて全身に得も言えぬ感覚が広がります。
そして、股間がスースーして太ももと太ももの付け根がピッタリとくっつくことに違和感を覚えました。
上半身を起こし自分の体を見て、え？と思う。
あれ？私、女になってる？
え？
私？
女になってるって？
自分を私と呼ぶこともそうだし、何よりも女性であることに違和感を感じます。
この感覚は何なんだろう？
それよりも、どうして私は此处に全裸で寝ているんだろう？
冷静にこの部屋にくるまでの行動を思い出そうとしたけど、寝る前にとあるSNSを見ていた所までしか思い出せません。
確か、女体化がどうのこうのというアンケートだったと思う。
どうして女の私が女体化についてのアンケートを見ていたんだろう？
それ以前の記憶を思い出そうとしたけど、頭がボーっとして思い出すことが出来ません。
どうして？何故ここに？
その時、頭の中に女性の声が響きました。

チャプター02 あなたはある目的のために此处に連れてこられた

「おはようございます。お目覚めになりましたか？」
え！何！？
「まあ、そう慌てず、ゆっくりとリラックスして下さいね。」
頭の中の声は私の考えていることもわかるみたいです。
「ここは、とある高級ホテルの最上階ですよ。」
高級ホテル？
「そうです。特別なお客様をお迎えするための部屋です。」
私が特別なお客？
「ええ、あなたはある目的のために此处に連れてこられました。」
ある目的？
「あなたは複数の男性に犯され、そして妊娠するためにここに来たのです。』あ

あなたは複数のふたなり女性におかされ』

ちょっと！何、言ってるの！

「あなたのことに好意を持っている人達に犯されるんです。嬉しいですよ？」
そ、そんな…。

「男性に犯されてもいいって、SNSのアンケートに答えたでしょ？」『ふたなり女性になら犯されてもいいって』

アンケート？そ、そう言えば…

あ、

「男の人で男性に犯されても良いと思う人は貴重な方ですから、こうして手厚くおもてなししているんです。」『男の人で犯されて良いと思う人は貴重な方ですから、』

男の人って？

「ああ、頭がボーっとして思い出せませんか？あなたは元々男性だったんですよ。」

何を言っているのか、わからなかった。

とにかく此处を出なくちゃ！

私はベッドから飛び起きてバスローブを羽織り、出入口と思われるドアに走りました。

鍵を開けようとしたけど、どうしてもドアが開きません。

ガチャガチャとノブも回してみたけど、ドアはピクリとも動きませんでした。

「ドアロックをかけてますから、外には出れませんよ。」

また頭の声がします。

彼女が言うには、このホテルの鍵は外からかけるようになっていて、中からは開けられないそうです。

中から開けれるのは私だけと声が言います。

「目的を達成するまで、あなたは此处から出られません、うふふ。」

優しい声だけど、言ってることは本当に恐ろしい。

激しく動いたせいか、頭がクラクラして意識がスーッと遠のいていく。

「どうしてこうなっているのか、知りたくありませんか？」

消えゆく意識の中で、うん、知りたい、どうしてこうなったのか、と頭の声に答えていました。

気が付くと、私は再びベッドの上で全裸で横になっていました。

今度はブランケットも無く全裸のままです。

エアコンが効いているのか、サーッと風の音が聞こえてきます。

暑くもなく寒くもない、全裸でも調度いい感じ。

「まだ女性になったばかりなので無理は禁物ですよ。」

また頭の中に声が聞こえてきました。

どこかで聞いたことがある女性の声です。

「さあ、あなたが此处に來た理由を思い出しましょう。」

頭の声は、そのままゆっくり深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、体の力を抜くように言います。

私は言われた通り、10回深呼吸をします。

「私の誘導に従って深呼吸して下さいね。」
「吸ってー、吐いてー」
「吸ってー、吐いてー」気持ちが少し落ち着いてきた
「吸ってー、吐いてー」頭が更にボーっとしてくる
「吸ってー、吐いてー」体の力がスーッと抜けていく
「吸ってー、吐いてー」全身の力が抜けて気持ちいい
「吸ってー、吐いてー」体そのものの重みを感じる
「吸ってー、吐いてー」ズーンと沈んでいく感じ
「吸ってー、吐いてー」どんどん沈んでいく
「吸ってー、吐いてー」深い、深い所に落ちていく
「吸ってー、吐いてー」力が入らない、もう動けない

深呼吸を終えた時には全身の力が抜けて、自分の体の重みで手足を動かせないくらいになっていました。

「あなたは元男性で、女体化して複数の男に犯されたいというアンケートに、イエスと答えたんですよ。」『女体化して複数のふたなり女性に犯されたいというアンケートに』

ボーっとする意識の中で、そんなアンケートに答えたことを思い出してきました。

「だからこうして女体化して、男性に犯されるために、此処に来たのですよ。」

『ふたなり女性に犯されるために』

確かにそう回答したけど、それは女の快感を味わってみたいという気持ちからで、犯されるのとは違うと思う。

女になって男の何倍も気持ちいいと言われるエクスタシーを体験したい。

おちんぼを入れる側じゃなくて、入れられる側としてイカされたい。

込み上げてくる快感に抗うことが出来ず、抵抗もむなしくイカされる。

犯すのではなく、犯されたい。

「そう、あなたは犯されるんです。あなたの心の奥にはどうしようもない願望があることを私は知っています。」

そう言われると、この艶(なまめ)かしい体を弄ばれたいという欲望が湧いてきます。

華奢な肩、つるつるで透き通るようなお肌、理想的なくびれとGカップはあろうかという胸、そして、勃起していくピンク色の乳首。

やだ、私、興奮してる。

まだ女になった実感がなく、まるでラブドールの中に自分が入っているような感覚。

だけど勃起していく乳首を見て自分が女になったことをはっきりと自覚しました。

それにしてもどうして私だけが女になったんだろう？

あのアンケートにイエスと答えた人は沢山いたはずですよ。

「回答者の中でもあなたが、一番、犯されたいという願望が強かったからです

よ。」

そういえば、女性が無理やり犯されるシーンを見て胸がドキドキしていました。

私もあんな風にされたい

無理やり拘束されて犯されたい

喉の奥までおちんぼを入れて欲しい

息が出来ないくらいイラマチオされたい

そう思っている自分がいることに気付きました。

私の欲望は思い出せるけど、その他の事を思い出そうとすると、頭がボーっとして思い出せません。

「まだ女になった自分に慣れていないようですね。あなたは成るべくして女になった。もう少し思い出しましょうか。」

私は、声の言うがまま、素直に従います。

「このホテルの地下3階にあなたがアンケートに答えた時の部屋をそのまま再現しました。

今から特別に鍵を開けてあげますから、その部屋を見に行ってください。

どうしてあなたが此处に来たのかわかりますよ。」

私は重い体を起こし、ガウンを羽織り外に出る準備をします。

そして、足元に黒いハイヒールのパンプスがあることに気付きます。

どうやら女の私はキャリアウーマンのようです。

パンプスを穿いて、フラフラとした足取りでドアを開けます。

驚いたことに、ドアの外は階段の踊り場になっていました。

ここは何階だろう？と思いながら、クラクラした頭で、ゆっくりと階段を降りてゆきます。

「このホテルは下に降りるほど時間がスクロールする不思議なホテルなんですよ。

1階降りる度に1時間後のあなたがドアを開けた先にいます。

地下は時間の流れが逆転して今から1時間前のあなたがいて、3時間前のあなたは地下3階にいますからね。

つまり、1階下に降りる度に、これからあなたがどのように犯されていくのか見ることが出来ます。

でも、開けないで下さいね。

今のあなたが見るとショックを受けますと思いますので。」

私はゆっくりと階段を降りてゆきます。

フラフラして頭がボーっとするので手すりに掴まりながら一段一段、ゆっくりと降りてゆく。

階段を降りる度に、より一層意識がボーっとして頭がクラクラしてきます。

下を覗くと暗くて先の見えない階段が永遠に続いているように感じる。

おりる度に、自分が暗闇の中にスーッと吸い込まれそうな感覚が襲ってきます。

階段をおりきって一つ下の階につきました。

踊り場にはドアがあって、その先には今から1時間後の私があります。

「ダメですよ、開けては」

私の好奇心を防ぐように頭の声が響きます。

そうだ、今は自分の目的を優先しようと足を一步すすめます。

でも、どうしてだろう？

自分がどうなるのか見てみたい、そんな思いが強くなってきました。

私はドアに耳をつけて聞き耳を立てます。

「ねえ、お願い、止めて...。」

絶望に打ちひしがれて懇願するような声が聞こえてきました。

自分の声なのに、どこかで聞いたことがある声。

私はどんな風に犯されるのだろう？

自分がどうなるか見てみたい欲望が勝り、ドアを開けたままにして室内の様子を伺います。

そこには、目隠しをされベッドにくくりつけられた自分がいました。

男の人が私を見おろし、「本当は犯されたいんだろ？」と言っています。『ふたなり女性が私を見おろし、本当は犯されたいんでしょう？』

そんな自分を見て、アソコがジュンと濡れてくるのを自覚しました。やだ、私、興奮してる。

犯されるのに、胸がドキドキするなんて・・・。

淫らな自分を隠すようにドアを閉めて下の階へ降りてゆきます。

薄暗いホールにコツコツと足音だけが響きます。

下りる度に更に頭がボーっとして、深い所へ落ちてゆくような感覚がしてきました。

どんどん、どんどん、落ちてゆく。

一段、足を下す度にスーッと深い所へ吸い込まれていくように感じる。

頭の中はからっぽになり、体だけがスーッと落ちていく感覚。

ただ、ボーっとした意識のまま深い所へ落ちてゆく。

どれだけ降りたのでしょうか？

4時間後？それとも5時間後？

あのまま私はどうなってしまうのだろう？

そんなことを思っていると、ドアの中からむせび泣くような声が聞こえてきます。

「やめて、もう許して...。」

どんなことをされているんだろう？

私は好奇心に負けて、ドアを開けたまま中の様子を見に行きました。

そこにはソファーにM字開脚で縛られ、涙を流しながら複数の男に犯されている私がいまいた。『涙を流しながら複数のふたなり女性に犯されている私がいまいた』

涙を流して、もう止めて、犯されたくないと思っているのに、私のアソコはグチョグチョで、床が濡れています。

私は犯されることに喜びを感じるマゾなののでしょうか？

自分の股間からツーッと愛液が垂れ出しました。

太ももの内側にタラリと冷たい感触が伝わります。

私はそれには気付かないふりをして部屋を出ました。

更に歩を進め、下に降りてゆきます。

もうその頃には、これから私がされること以外、何も考えられなくなっていました。

コツコツと足音だけが響く階段ホールを下へ下へ降りてゆきます。意識が朦朧として体の重みだけで、どんどん下へ落ちてゆく感覚です。

一段下りる度に、サーッと深い所に落ちてゆく。

自分の欲望の深い、深い所まで落ちて、そこに本当の自分がいる。

どこまで降りたのでしょうか？

これ以上、下に降りる階段はありません。

無意識に私は地下3階まで降りていました。

今から3時間前の私がいる部屋です。

チャプター03 こんな可愛いのがから仕方ない

ドアを開けて、今から3時間前の自分を見に行きます。

そこには、パソコンに向かい、何かを読み上げている女になった自分がいました。

ん？女になった私？

「女体化して男に犯され、、ですか？」『女体化してふたなり女性に犯され』

そこへ、一人の女性が現れました。

彼女も女になった私でした。

女は私の左肩に手をのせて、何か言っています。

そっと左肩に手を乗せられ、彼女の柔らかな手の感触を感じます。

私は私でありながら彼女でもある。

頭がこんがらがり、増々、意識がボーっとしてきます。

そして、私はフラフラしながら彼女に手を引かれベッドへ向かいます。

時計を見ると先ほどから時間が逆戻りして2時間前になっています。

ずっといって、そのまま時間が進むようです。

女は私をベッドに寝かせて、上から私を覗き込んでいます。

私は目を開けて、彼女の顔を見上げました。

リアルドールのように美しく、愛くるしい顔。

なんて可愛くて情欲を誘う顔なんだろう。

自分がこんなに可愛くてエッチな女になっていることを嬉しく思います。

私、こんなに可愛いんだから犯されても仕方ないよね。

綺麗な女になり過ぎた自分が悪いんだわ。

そう自分に言い聞かせます。

そのまま女は私にキスをしてきました。

柔らかくてプルプルでピンク色のいやらしい唇。

「この声、どこかで聞いたことがあるでしょ？」

そう言えば、頭の中に聞こえてきた声とそっくりです。

「そうです、この声はあなたそのものです。

あなたは、いえ、私は自分で自分をこのホテルに連れてきたのです。」

ボーっとした頭では深く考えることが出来ません。

声の言うように私は自分の意思で、この部屋にきた。
そう、私は犯されにきた。
彼女は私の両胸を揉んで、「あなたの柔らかくて大きな胸、そして、ツンと勃起した乳首にしゃぶりつきたくなるわ」と、いやらしく囁きます。
やわらかく、何度も何度も胸を揉まれ、自分がいやらしい体になったことを自覚しました。
時計を見ると1時間前に進んでいます。
彼女は片方の手で私の胸を揉みながら、もう片方の手を股間に移動させ、「ここは一番犯されるところですから、良く濡れるようにしておきましょうね。」と割れ目に指を入れてきました。
にゅりと中指がバギナの中に入ってきます。
アナルよりもキツくないけど、肉壁が指全体にねっとりとからみつきます。
指を付け根まで入れられ、手の平で股間を包み込まれました。
ツルツルで平らな股間は自分が女であることを意識させられます。
「ペニスを入れられれば入れられるほど、濡れるようにしてあげます。」
しばらくすると、バギナの内部が愛液でドロドロになり始めました。
「あなたはペニスを入れられれば入れられるほど、愛液で濡れるおまんこになる。そして、擦られ、突かれるほど気持ち良くなりますからね。」
もうその頃には頭の声と自分の声の違いがわからなくなっていました。
あの女性は私自身だったのでしょうか？
「そうです。私はあなたであり、あなたは私、ここにはあなた、私自身が自分の意思で来たのです。」
時計の針は私が地下に降りてきて、3時間が経過していました。

チャプター04 悪魔の快感

私は部屋を出て地上1階に行こうとしましたが、ホールに階段は無く、エレベーターがあるだけです。
このエレベーターで1階に上がってホテルを出よう。
そう思った時、誰かが私を背後から抱きしめ、口を塞いできました。
もの凄い力で抱きしめられ、身動きが出来ず声を出すことも出来ません。
こんな力を出せるのは男の人しかいない。『こんな力を出せるのは、かなり筋肉質なふたなり女性に違いありません。』
私は心の中で「いや！やめて！」と叫びましたが、男はエレベーターの中に、私を連れ込みます。『女はエレベーターの中に』
「こうしてほしかったんだろ？」『こうして欲しかったんでしょ？』
うう、いや！と抵抗しますが、男の力には敵いません。『彼女の力には敵いません。』
その時、また頭の声がしました。
「今からあなたは身も心もボロボロになるまで犯されます。
でも大丈夫ですよ。
あなたは犯されれば犯されるほど気持ち良くなり、恐れれば恐れるほど快感は

どんどん強くなりますからね。
そして、激しくピストン運動されればされるほど感じてしまう。
泣けば泣くほど体がビクビク痙攣して激しくイカされる。
絶望すればするほど体が敏感になり、相手を拒絶すればするほど、深い深いオーガズムに襲われるんですよ。
あまりに感じすぎて、過呼吸で息が出来なくなるかもしれません。
だから、あなたが、もうこれ以上耐えられないと感じた時だけ体が自由に動いて、このホテルから出ることが出来ますからね。
でも、あなたなら耐えられ、」

プツリと頭の声が途切れました。
エレベーターが止まり、ドアが開きます。
男は私を軽々と持ち上げ、部屋に連れ込み、ベッドの上に私を横たえました。『女は私を軽々と持ち上げ』
私は無意識に立ち上がり、入り口に走ってドアをガチャガチャと開けようとしています。
でも、ドアノブはピクリとも動きません。
やだ！開(ひら)いてよ！どうして開かないの！（焦っている感じで）
その時、背後から追ってきた男に腰に手を回され、そして手首を抑えられ、こう言われました。『背後から迫ってきた女に腰に手を回され』
「静かにしないと、どうなるかわからないのか。』『どうなるかわからないようね。』
（無慈悲に棒読みで）
私はヘナヘナと床に崩れおち、体中の力が抜けてしまいました。
一度入ると、もう中からカギを開けることは出来ないんだ・・・。
私は絶望に打ちひしがれ、男に持ち運ばれて、ベッドに横になりました。『女に持ち運ばれて』
地下に行く前に、私が全裸で寝ていたベッド。
ほんとについ先ほどまで寝ていたかのように、背中にシーツの生温かさが伝わってきます。
窓の外は高層ビルが立ち並び、最上階の部屋に連れられてきたようです。
そして、サーっというエアコンの音も聞こえてきます。
男は、私に両腕を上げて頭の上で組むよう、言います。『女は』
これ以上何か抵抗したら、本当に何をされるか分からない。
そんな恐怖心から私は言われるがまま腕を上げ、左右の手首を交互に掴みました。
まるで、自分で自分を拘束しているかのように、私の隠れた被虐心を露わにされた気分です。
そして、手首をバスローブのひもで縛られ、ベッドに括り(くくり)付けられました。
予め用意していたのでしょうか、更に目隠しをされます。
男は膝を立てて脚を開くよう、私に言います。『女は膝を立てて脚を開くよう』
躊躇していると、「早くしなさい」と、もの静かな声で指示されました。『早く

して』

私は覚悟を決め、膝を立て、脚を少しだけ開きました。

その時、太ももの内側に電撃が走りました。

(ピシッ!) 効果音

「もっと大きく広げて」

あまりの衝撃に考える暇もなく、無意識に脚を広げてしまいます。

え？今、何をされたの…。

「言う事を聞かないと、どうなるかわからないのか。』『どうなるかわからないの?』

痛くはないけど、叩かれることにある種の恐怖心を覚えます。

でも、私のアソコはピクピク小刻みに震え、愛液がタラリと落ちてきました。

やだ、私、興奮してる。

これが彼女の言っていたことなの？

恐れれば恐れるほど感じてしまうって。

また叩かれるかもしれないのに、その事で私は興奮している。

男は私の両膝を掴み、更に大きく脚を広げました。『女は私の両膝を掴み』

もうアソコは丸見えです。

私は、「ねえ、お願い、やめて…」と言いましたが、それは、もつとして! という意味でしかありませんでした。

「こんなに濡らして、もう感じているのか? 見ず知らずの男に処女を奪われるのに怖くないのか?」『もう感じてるの? 見知らぬふたなり女性に処女を奪われるのに怖くないの?』

私は首を左右に振り、怖い! 知らない人に犯されるなんて、死にそうなくらい怖い。

それに、処女を奪われる時は凄く痛いと言っているし、頭がクラクラする。

それなのに私のアソコは益々愛液を垂れ流し、心臓がバクバクと興奮している。

男は「前戯はいらないようだな、入れてやろう。」とベッドの上に乗る、私の股の間に入ってきました。『女は「前戯はいらないようね、入れてあげるわ』

うそ、やめて! キスも前戯も無しで入れられるなんて!

私は脚を閉じようとしたのですが、両膝を捕まれ閉じれません。

そんな、ダメ!

その時、また、太ももの内側に電撃が走りました。

(ピシッ!) 効果音

あっ!

シャーッとアナルに向けて冷たい感覚が走ります。

うそ!? 私、お漏らししたの?

「もう漏らしたのか。』『もう漏らしたの?』

犯される恐怖と、それを阻止出来ない絶望感、不意に放たれるスパンキングで私は頭が真っ白になりました。

そして、腰が抜けたようになり、太ももの力も抜けて脚が自然と大きく開きます。

やめて、お願い...

もう何を言ってもこれからされる事を防ぐことは出来ません。
抵抗も虚しく、割れ目の中心に肉棒の先端を当てがわれます。
目隠しをされているので分かりませんが、入り口の何倍も太そうです。
こんな太いの初めてなのに無理！
男は割れ目に沿って、おちんぽを上下に動かし、「ローションは要らないな、グ
チョグチョじゃないか」と言います。『女は割れ目に沿って』『グチョグチョじ
ゃない』
次の瞬間、グーっとヴァギナを押し広げられペニスが中に入ってきました。
う、うそ！ほんとに入れるの？！
思わず無意識に腰を動かしペニスから逃れようと言います。
その時、また太ももの内側に衝撃が走りました
(ビシッ！) 効果音
あ！今度はかなり強くスパンキングされたことが腰まで響く衝撃でわかります。
一瞬動きが止まった瞬間、ズブリと肉棒を更に押し込まれます。『ズブリとペニ
スを更に押し込まれます。』
や、やだ！き、きついよお！
痛みはありませんが、おまんこが張り裂けそうなくらい拡張され違和感が半端
ありません。
「まだ先端しか入ってないぞ」と言いながら、更に奥へ肉棒を突き立ててきま
す。『まだ先端しか入っていないわよ』『更にペニスを突き立ててきます』
やめて！これ以上入れないで！
男は私のことなどお構いなしに、肉棒を中へ押し込んできます。『女は私のこと
などお構いなしに、ペニスを更に押し込んできます。』
膣壁を押し広げられ、その周りの内蔵まで圧迫されて、体内の異物感が凄まじ
い。
下腹部の上側と腰骨、そして左右の骨盤に向けて圧迫されます。
体の中心を貫かれる感覚から早く解消されたい！
一秒でも早く抜いて欲しい！
すると男は「しばらくこのままにしておこう。」と、私の心を見透かしたかのよ
うに言います。『すると女は「しばらくこのままにしておいてあげる。」と、』
嫌！早く抜いて！
体内にある異物から逃れようと腰を動かしますが、男に腰をつかまれ動けませ
ん。『女に腰をつかまれ動けません。』
この状況から逃れようとすればするほど、ヴァギナとペニスの結合部に意識が
向いてしまいます。
信じられない事に、私のおまんこはペニスをヴァギナの奥深く飲み込むように
収縮し始めました。
私の思いとは関係なく、肉棒を咥え込み、愛液を出しながら奥へ奥へ引き込み
ます。『ペニスを咥え込み』
「凄まじい吸い付きだな。』『ものすごい吸い付きね』
男は私を辱(はずかし)めるように言います。『女は私を辱めるように言います。』
そんなことない！早く抜いて！

私は叫びましたが、「もっと凄い事になる」と言い、微動だにしません。『「もっと凄いことになるわ」』

まるで触手が獲物を飲み込むようにペニスを加え込む。

しばらくすると、ドロドロの愛液が膣口から溢れ出しました。

心では嫌だと思いながら、私のおまんこは肉棒を飲み込み、早く動いて欲しいと望んでいる。『私のおまんこはペニスを飲み込み』

やめて！早く抜いて！

このままペニスを抜き差しされると自分がどうなるか、もうわかっている。

だから、私は必死で抵抗しました。

だけど、私のあそこはジュルジュルと愛液を垂れ流し、早くペニスに動いて欲しくて堪らない。

「奥を突いてほしいのか」『奥を突いて欲しいの？』

私は、ダメ！やめて！抜いて！と叫びました。

男は肉棒を膣口近くまで、ゆっくり引いて、次の瞬間、ズボッと一気に奥まで突き立ててきました。『女はペニスを膣口近くまで』

あっ！（軽い悲鳴のようでありながら快感を感じているように）

バグナを押し広げられる感覚とポルチオを突かれて子宮全体がブルッと震える体感に、思わず声を上げてしまいます。

何？今の感じは？

更に、もう一度ペニスを引いて、今度は一気に奥の奥まで突かれます。『女は』ズン！という衝撃と共に、子宮全体がグアンと震え、下腹部全体に奇妙な気持ち良さが広がりました。

ああ！（今度はハッキリと快感を感じて気持ちいいように喘ぎ声で）

今度は明確ではないけれど、気持ち良さを感じます。

うそ！？見ず知らずの男に処女を奪われて、気持ちいいなんて。『見ず知らずの女に処女を奪われて』

自分の体の反応に驚くと共に、この後自分がどうなるのか恐ろしくなってきました。

更に、男は肉棒を勢い良く引いて、腰を打ち付けてきます。『女はペニスを勢い良く引いて』

ああ！（喘ぎ声で）

3度目はハッキリと気持ち良さを自覚しました。

こ、これ、気持ちいい…。

ズブズブと膣壁を押し広げられる快感

奥を突かれて子宮全体が震える快感

そして、自分では認めたくないけど、犯されることに喜びを感じ始めている…

性的快感と同時に被虐心、そして背徳感を刺激され、私は頭も体もおかしくなり始めていました。

このまま犯されたら私、滅茶滅茶になっちゃう！

自分が堕ちることへの恐怖心が急激に湧いてきます。

いや！やめて！もう抜いて！

私は訴えましたが、男は無慈悲にピストン運動を始めました。『女は無慈悲にピ』

ストーン運動を始めました。』

サーっと引いてはズンと奥まで突かれ、その度に私は「ああ！」と喘ぎ声を上げてしまいます。

おまんこを肉棒で満たされながら、奥の奥を突かれる快感に私は敗北したのです。『おまんこをペニスで満たされながら』

「もう嫌、これ以上動かないで...。」

諦めに満ちた声に、もう説得力はありません。

男は「もう快感に負けたのか、心だけは正気を保っておけ。」と言います。『女は「もう快感に負けちゃったの？最後まで正気でいられるかしら？』

その一言で私の体は完全に性の快感に陥落してしまいました。

「ああ、これ、いい・・・。」

ズブズブと出し入れされる度に、喘ぎ声を上げてしまいます。

「あっ、あっ！」

ゆっくりリズミカルに奥を突かれ、おまんこを押し広げられる気持ち良さと合間って、何とも言えない感覚が下腹部に貯まってゆきます。

何か変だよ、私...

もうその頃には、私のあそこからイヤらしい汁がドロドロに垂れ出ているのを分かっていました。

男は私が感じていることを確認して、ピストン運動を速めます。『女は私が感じていることを確認して』

下腹部内に次々と気持ち良さが貯まってゆき、喘ぎ声が激しくなります。

ああ！いい！

快感がどんどん大きくなり、今にも破裂しそう。

「犯されているのにイクのか？」『犯されているのにイクのか？』

男は、私がイキそうになっていることに気付いたようです。『女は、』

私は我に返り、そんなことない！気持ち良くない！と言いましたが、快感の波はペニスで突かれる度に大きくなってゆきます。

これがあの女の人の言っていたことなの？

絶望すればするほど体は敏感になり、拒絶すればするほど激しくイってしまう。

そんなの嫌だ、犯されてイクなんて嫌だ！

そう思えば思うほど体の奥が疼き、快感はどんどんたまってゆきます。

心では拒んでいるのに、体は気持ち良くて仕方ありません。

ダメ、ダメだよ、イっちゃうよ...。

もう限界でした、このまま貫かれたら快感に負けてしまう！

や、やめて...

拒絶の言葉を言えば言うほど、気持ち良くて仕方がない。

ダ、ダメ...

拒めば拒むほど快感が溜まって破裂しそう！

「まだ分かっていないのか、あと10回拒めばイってしまうぞ。」『まだ分かっていないようね、あと10回嫌がったらイってしまうわよ』

そう言われても無意識に拒絶の言葉が出てしまいます。

や、やめて...
でも、奥が気持ちいい！
ダ、ダメ...
それなのに貫かれて感じる！
動かないで...
でも、もっと、来てほしい！
お、奥はやめて！
本当はもっと奥に来て！
いや、お願い！
もう、腰が抜けそう！（あと5回）
い、いやだよ！
止めないで、もっと私を犯して！
こ、こんなのダメ！
でも、気持ちいいの！たまらない！
これ以上動かないで！
ううん、もっと激しく突いて！（あと2回）
もう、いやだよ！
これ以上感じたらイッちゃうよ！（1回）
ダメ、いや！
もうイクよお！
イク！イク！イクー！
体中がビクビク痙攣する！アナルが収縮を繰り返しバギナもヒクヒク痙攣する！下腹部がビクンビクンと波を打ち、あぁー！とアクメ声を上げる！

ふと我に返り、私は犯されてイってしまったことへの嫌悪感と羞恥心でいっぱいになりました。
こんなのありえない。
頭では拒絶しているのに体は気持ち良くて仕方がない...。
私はこの後、何をされてどうなっていくのだろう。
不安と恐怖に押しつぶされそうになりながらも、これからされるイヤらしい行為への期待で胸が一杯になりました。

チャプター05 ペニスで口内を犯される快感

男は、イッたばかりで意識が朦朧としている私を抱き上げて、一人掛け用のソファに座らせました。『女は』
M字開脚で脚を開くように言われ、私はスパンキングをされる恐怖から無意識に脚を広げてしまいました。

もうおまんこが丸見えになっていることに構っているわけではありません。
そのまま布製の紐で脚をソファに固定され、腕も背中の中で縛られました。
そこにノックをしてホテルの従業員が二人、カートに何かを載せて入ってきました。

二人は私の様子を見ても、特に驚いた表情をしません。
でも私は、これがココから逃げる最後のチャンスだと直感で感じ取りました。
あらん限りの大きな声で私は助けを求めます。

「助けて下さい！私、この人に犯されているんです！ココから出して下さい！」
心の底から助けて欲しいとお願いしました。

ところが従業員の二人はニヤリと不適な笑みを浮かべるだけです。

ど、どうして？そんな顔をするの？

ねえ、助けて…。

見たら分かるでしょ？私、犯されてるんだよ…。

全身から血の気が引いていくのをはつきりと感じました。

そして、信じられない事に、アソコが疼いていることも自覚せざるを得ません。
私は、この状況に対する絶望感と自分の体の底知れぬ暗闇に恐怖しました。

う、ウソ、、こ、こんなのあり得ない…。

絶望しながらも体の疼きを抑えられないのです。

男は「次、入れる時は中に出してやる」と無慈悲に言います。『女は』⇒『女は次、入れる時は中に出してあげるわ』へ追加変更願います。（提出して頂いた音声の2分18秒辺り）

いやだ！そんなのいや！まだ好きな人とのエッチもしていないんだよ！

全身を左右前後に揺さぶり紐を解こうとしましたが、もがけばもがく程、キツく縛られてゆきます。

いや！此处から出して！

半狂乱で助けを求めているのに、股間からはドロリと愛液が溢れ出てきます。

やだ、私、興奮してる…。

そうなのです。

逃げたい！犯されたくない！と興奮するほど、その興奮を性的興奮として心と体は感じとってしまうのです。

「やっと自分の性癖に気付いたのか。」『やっと自分の性癖に気付いたのね。』

男は私の内面の変化を鋭く言い当てます。『女は私の内面の変化をサラリと言い当てました。』

違う！そんなことない！

首を左右に振って否定しますが、アソコから益々愛液を垂れ流し、乳首は大きく勃起し始めます。

従業員の一人が私の横に立ち、勃起したペニスを唇に押し付けてきました。

私は唇をキツく結んでフェラチオを拒みます。

でも、顔を横に向けるよう命じられ、ペニスを唇の真ん中に押し当てられました。

唇をこじ開けようと、ぐいぐいペニスを押し付けられるけど、唇を固く閉じてフェラチオを拒否します。

「それでいい、拒めば拒むほどイラマチオされた時の快感が大きくなる。』『それでいいのよ、拒めば拒むほどイラマチオされた時の快感が大きくなるわ。』
そうでした、止めて欲しい！この状況から逃げ出したい！と興奮するほど性的な興奮も高まるのでした。

そんな私を見て激しく欲情したのか、ペニスの先からカウパー腺液が溢れて出てきます。

それが潤滑剤になって徐々にペニスで唇をこじ開けられそうになります。

うう、もうダメ...

頬の筋肉の疲れとともに少しずつ唇が緩み始めます。

あ、あがっ！

私は全身の力を顔の筋肉に集めるように固く口を閉じようと頬に力を入れます。
ダ、ダメ！ここで負けたら、そう、フェラチオさせられたら、このままズルズルいっちゃう！

でも、いつまでも唇を閉じておけるはずありません。

少しずつ、少しずつ、口内にペニスを押し込まれます。ウっ！あがっ！（ペニスの先端が口内に入っている感じで）

ついにペニスの先端で口内も犯されました。

こうなるといくら抵抗してもペニスを受け入れざるを得ません。

頭を両手で押さえられ、グーっと喉の奥までペニスで貫かれます。

んん！ひゃなひて！（「離して」をイラマチオされている感じで）

喉の奥の奥まで貫かれて息苦しいのに、あり得ないことにそれが気持ちいいのです。

私は心の中で、嫌だ！こんなことされて気持ちいいはずがない！と叫びましたが、体はそうではありません。

喉の奥まで貫かれる被虐心

口内をペニスで満たされる息苦しさ

頭を押さえられ逃げたくても逃げれない絶望感

そのすべてが気持ち良さ、性的興奮、体の震えになってゆきます。

やめて！苦しいよ！でも気持ちいい！

喉の奥まで犯されて早くペニスを吐きだしたい！でも、止めないで欲しい！

もう止めて...、早く抜いて...

だけど体の底から快感が湧いてくる！

「気持ちいいのか、このままイカせてやろう。』『気持ちいいの？このままイカせてあげるわ』

男は更に奥までペニスを押し込んでいきます。『女は更に奥までペニスを押し込んでいきます。』

もうほんとダメ、喉の奥を塞がれて苦しいよお！でも奥を突かれて気持ちいいの！

「このまま1分、奥を貫いてやる、最後はもがき苦しみながらイクだろう」『奥を貫いてあげるわ、最後はもがき苦しみながらイクでしょうね。』

いや！1分もされたら窒息しちゃうよ！

あと60秒、だけど私、感じる！
50秒、く、くるしい！早く抜いて！
40秒、でも止めないで！ほんとは気持ちいいの！
30秒、もうダメ、窒息しそう！
20秒、頭がクラクラするくらい感じるよお！
10秒、い、意識が飛びそう、もうダメ！死んじゃう！
5秒、ほんとは喉の奥が気持ちいい！頭がクラクラするくらい感じる！
4、体がイラマチオを拒絶している！
3、でも、喉の奥から全身に快感が広がっていく！
2、もうダメ、これ以上されたら私、狂っちゃう！
1、意識が朦朧として全身が小刻みに痙攣する！
ゼロ！アガ！（喉の奥から絞り出すような喘ぎ声で）白目むいて喉の奥からア
クメ声を上げる！全身がガクガク震えていつまでも止まらない！おまんこから
ドロドロと愛液が流れだして股間を濡らす！涎が溢れ出し乳房と太もものにひん
やりとした冷たさを感じる！

ペニスを抜かれた私は俯いて（うつむいて）口を半開きのまま、愛液でびしょ
濡れになったソファを眺めていました。

CHAPTER06 拘束電マ責めに発狂する

男は従業員が運んできたトレイに向かい、何をもってくるようです。『女は従業員
が運んできたトレイに向かい』

それはよくある電動マッサージ機でした。

でも、一つではなく3つです。しかも、本体からコードまで全てが真っ赤な電
マです。

私は真っ赤な電動マッサージ機を見て、またも興奮を覚えました。

体中の血液が全身をぐるぐると駆け巡り、体がカーッと熱くなっていくのを感じ
ます。

この真っ赤な電マでクリトリスを刺激されたら私、発狂しちゃう！

「今度は肉棒じゃなく、これで口を塞ごう。」『今度はペニスじゃなく』

私は黒タイツの股間部分を口内に押し込まれ、脚の部分を二重に巻かれて首の
後ろで結ばれました。

タイツを使った猿轡です。

あぐええ！

「これで、どれだけ叫んでも大丈夫だな」『どれだけ叫んでも大丈夫ね』

私は必死で叫びましたが、これでは声がこもって室外にさえ届いていないでし
ょう。

一人が真っ赤な電マを私の股間に、そして二人はそれぞれ電マをスぺンス乳腺
の辺りに近づけます。

あ！ダメ！そんなことされたらほんと壊れちゃう！

男達がスイッチを入れ、鈍い音が室内に響きます。『彼女達がスイッチを入れ』嫌だ！ほんと私壊れちゃう！本気でそう思いました。スぺンス乳腺を刺激されたら全身の感度が何倍にも跳ね上げることを知っているからです。クリトリスのように即効性はないけど、一度気持ち良さを感じてしまうと全身クリトリス状態になってしまう。そして、その時は確実にやってくる。ふいに、左右の乳房の横に真っ赤な電マを押しあてられました。ああ！左右の乳房から振動が胸の中に注がれます。真っ赤な電マを見て血液の流れが速くなったせいでしょうか、あっという間に胸全体がムズムズと気持ち良くなり始めます。やめて！許して！これ以上されたら感じちゃうよ！無慈悲にも、グーンと鈍い振動が胸の中に蓄積してゆきます。もうダメでした、胸の中に貯まった振動が限界を超えて快感に変わり始めます。電マの振動そのものが快感になる恐怖…。コップから水が溢れ出るように、振動が快感に変わり始めます。ああ！感じるよお！胸から全身に快感の振動が広がります。それと同時にクリトリスにも真っ赤な電マを押し当てられました。ヒィ！クリからも振動が全身を駆け巡り、私は全身を硬直させて迫りくる終わりの始まりに必死で耐えます。そして、クリからの振動は確実に私の中にオーガズムの元を送り込み、スぺンス乳腺からの刺激は気持ち良さに変わってゆきます。もう限界でした。左右の乳房とクリトリスの3点同時に私はイカされる。その衝撃に私は耐えられない。それなのに壊れることを望んでいる自分がある事に気付きます。絶望すればするほど激しいアクメに襲われる。これがあの女の人、そう私が言っていたことなんだ。クリトリスからの快感が体の中心を貫き、スぺンス乳腺からの振動が全身を覆い体の内と外から私は壊される。どんどん振動がアクメの元になり体内に蓄積してゆきます。全身が硬直しながら小刻みに痙攣し始め、アクメの瞬間が近づきます。もうすぐクリからの振動が体の中心で爆発し、スぺンス乳腺の衝撃に身体の外から押し潰される。真っ赤な電マの振動が加速し、私は一気に追い込まれました。ああ、もうダメ、私こわれる！あ！もうイクよ！ほんと私、壊れる！ねえ！イクよお！イク！イク！イクー——！！！！

体の中で快感が爆発する！声にならない絶叫でアクメ声を叫ぶ！全身がガクガ

ク痙攣して、いつ止まるか分からない！

痙攣が収まるまで何秒かかったのでしょうか？

まだ小刻みにお腹の筋肉はピクピクと痙攣しています。

「もっとイカさせてやろう」『もっとイカせてあげる』

やだ！もうあんなイキ方したくない！

死ぬほど気持ちいいけど、身も心も壊されてボロボロになっちゃう！

また、あの絶頂に耐えないといけない、いえ、耐えられない、次イカされたら本当に発狂してしまう…、

私の心の内など関係なく、電マをスペンス乳腺に押し当てられます。

イヤ！もうヤだよ！

またあのアクメを迎える。想像しただけで私は絶望しました。

ねえ、止めて、もう許して…。

フッと体の力が抜けると同時に、股間と腰の震えもとまり完全に脱力してしまいました

シャーっと股間から水音がします。

「腰が抜けたようだな」『腰が抜けたようね

一瞬、電マが体から離れましたが、すぐにクリトリスとスペンス乳腺に押し当てられます。

強烈な衝撃波が全身を駆け巡り、再び体が硬直しはじめます。

や、止めてー！許して！ほんと壊れるよー！

どれだけ叫んでも、彼らには、何を言っているのかわからないでしょう。『彼女達には』

私は心の底から絶望し、体をワナワナと震わせ耐えるしかありません。

すぐに振動が強くなり、アッと言う間にアクメの淵まで追い込まれました。

も、もうダメ、やめて、死んじゃう…

硬直しながら体が小刻みに痙攣し始めます。

また私、イッちゃう！壊れちゃう！

真っ赤な電マの振動がさらに加速します。

ごめんなさい、ゆるして、わたしイっちゃよ…

ねえ、イクよお！

イク、イク、イクー！！！！

股間から潮が天空に吹き上げる！顎が外れるほど喉の奥から絶叫する！全身が激しく痙攣してソファがガタガタと激しく揺れる！

そのまましばらくビクビク痙攣しながら私は泣いていました。

もうイヤだよ、こんなの…

このまま何度もされたら私、死んじゃうよ…

涎と涙と潮でビショビショになった私の身体は鈍い光を放ちながら小刻みに震えていました。

カチャリとドアが開く音がします。
今から数時間前の私が部屋を覗きにきました。
逃げて！ここから逃げて！
でも私の思いは猿轡で声になりません。
私を見た私は驚いたような表情をしていましたが、私を救おうともせず静かに出ていこうとします。
行っちゃダメ！行かないで！
ねえ、どうして助けてくれないの！
ドアがガチャリとしまり、この後、私は本当の絶望を思い知らされることになります。
何故...、どうして行ってしまったの...
私は、体中の力が抜けていく感覚だけを感じていました。

チャプター07 3点同時責めの恐怖と快感

私は紐を解かれ、再びベッドに連れていかれました。
猿轡を外されましたが、もう大声で助けを求める気力も体力もありません。
一人のベッドに横になり、私は男の上に仰向けに寝かされます。『一人のふたなり女性がベッドに横になり、私は彼女の上に仰向けに寝かされます。』
え？何をするの？
男は「脚を開くんだ」と言います。『女は「脚を開きなさい」と言います。』
私は嫌な予感がしました。
男の上から逃れようとしたけど、両腕を抱えられて逃げられません。『女の上から逃れようとしたけど』
やめて放して！
だけど、もう一人に脚を開かれて、直ぐにでも挿入されそうです。
何をするの！もう止めてよ！
あっ！
内股をスパンキングされ、一瞬逃れようとする動きが止まります。
「静かにするんだ」『静かにしなさい』
命令されると同時に再びスパンキングされて、私は体の力が抜けてしまいました。
また犯される...。
そう思っても、もう相手を拒絶する力もありません。
私が脱力したのを確認して、下の男がアナルに肉棒を当てがいます。『下の女がアナルにペニスを当てがいます。』
え！？アナルに入れるの！？
や、やめて！そこだけはやめて！
私は必死で訴えました。
腰を動かし挿入を拒みます。
しかし、腰をおさえられ動けません。
いや！それだけはいや！

でも私の身体は拒めば拒むほどアソコから愛液が溢れ出し、アナルを潤します。
「アナルがヒクヒク収縮して、大きく開いてきているぞ。」『大きく開いてきているわよ。』

動けなくされ、無防備な入り口にペニスの先がグチュリと音を立てながら入ってきます。

あっ！やめて！

自分でも驚くほどアナル周りの筋肉が緩んでいて、痛みもなくペニスの先端が入りました。

それでもアナルを押し広げられる感覚はヴァギナとは比べものになりません。誰にも見られたことのない恥ずかしい所を貫かれている被虐感、そしてそれを許してしまった敗北感。

それなのにアナルを貫かれ、押し広げられることに快感を感じている。

ああ、き、気持ちいい、か、感じる。

ズブズブと更に奥まで貫かれます。

入り口がこれでもかというくらい押し広げられ、直腸内をペニスで埋め尽くされた感触に酔いしれました。

これがアナルSEXの快感なんだ。

男がゆっくりと、ストロークを始めます。『女がゆっくりと』

引かれる時に入り口を擦られる快感

そして、貫かれる時も擦られ、奥の奥までペニスを押し込まれた時に腰に響く快感に私は陥落しました。

何度も出し入れされ、アナルの入り口を擦られただけでイキそうになります。

そして、グッと押し込まれる度に腰まわりに電流が流れ、もう腰が抜けそうです。

あっ、あっ！もう感じるだけの身体にされてしまった私。

体を仰け反らせ喘ぎ声を上げ続けます。

そのまま、おまんこも貫かれアナルとポルチオを犯される凶悪な快感に私は完全敗北したのです。

そして、もう一人の男にイラマチオされます。『もう一人にイラマチオされます』

口内を犯され、おまんこことアナルを貫かれ、私はただ弄ばれるだけの存在。

なのに口内もアナルもおまんこも気持ちいい！

涎を垂れ流し、おまんこからハメ潮を吹き上げ、アナルからはドロドロの腸液が溢れ出てきます。

「気持ちいいのか、それではつまらないな。」『感じてるの？そんなのつまらないわね。』

「このまま中出ししてやろう」『このまま中出ししてあげるわ』

私はハッとします。

そんなことされたら赤ちゃん出来ちゃう！

私は首を左右に振り、腕をバタバタさせて拒否していることを伝えようとしました。

男達はそれには何の反応も示さず、増々ピストン運動を速めます。『女はそれには反応せず、』

いや！中に出すのだけはやめて！

私は叫びましたが声になりません。

今日は危ない日なの！だからお願い、やめて！

首を左右に振ろうとしましたが（男に）顔を抑えられ、最後の抵抗も出来ない状態にされます。

私は止めてほしい気持ちと、体内を襲う激しい快感で何が何だかわからなくなってきました。

アナルを押し広げられることが気持ちいい！

骨盤に響く振動に腰がぬけて動けない！

おまんこを貫かれ下腹部内を感じる！

でも、やめてほしい、中に出すのだけは許して！

ううん、ほんととはもっとして欲しいの、でもこれ以上はダメ！

全てを受け入れる覚悟と拒絶しても敗北してしまう絶望感

私は最後の力を振り絞り腕をバタバタさせて中出しだけは拒む姿勢を示しました。

どんどん快感に押しつぶされ最後の時が近づきます。

「あと１０回貫いたら中に出してやる」『あと１０回貫いたら中に出してあげる』

もう全てを受け入れる覚悟を決めました。でも、心の片隅では抵抗する気持ちがまだ少しだけ残っています。

１０、イ、イヤ、ほんと、もうやめて！

９、でも、おまんこもアナルも気持ちいい！

８、お願い、もう許して、これ以上されたら

７、私、こわれる！感じすぎて壊れる！

６、だから、もうやめて！感じすぎて怖い！

５、ああ、もう私、壊れる！滅茶苦茶にされる！

４、ねえ！中出しだけはやめて！だけど！

３、奥が気持ちいい！おまんこ感じるよお！

２、いや、中はイヤ！ダメなの、中だけはダメ！

１、ああ、いいよお、ほんとには中がいいの！中に出して！

ゼロ！下腹部内がビクビク痙攣する！精液を子宮の奥深くに飲み込む！腰が抜けて潮を吹き散らす！手足が硬直しながらビクビク痙攣する！体を仰け反らせ喉の奥までペニスを咥え込む！

喉の奥、おまんこの中、アナルの奥の奥

３か所同時に精液を注がれたことに私は心の底からの安らぎと快感を覚えました。

本当は嫌なのに、中出しされることに喜びを感じている...

相反する(あいはん)二つの感情を持ちながらのSEXがこんなに気持ち良いとは知りませんでした。

しばらくベッドの上で放心状態のまま私はそんなことを感じていたのです。
そして、私は男達に此处に来た時の服を着せられて、部屋の外に開放されました。『私は彼女達に此处に来た時の服を着せられて』
ゆっくりと階段を降りて1階に向かいます。
たしか、ここが1階だったはず。
それとも、もう一つ下だったかな？
私は自分が何階にいるのかわからなくなってきました。
そうだ、このまま階段を降りて一番下の階まで行って、3階分 上に上がれば1階に行ける。
そうして、私は地下3階まで降りてゆきました。
数時間前に私が入って行ったドアが目の前にあります。
このまま1階まで上がれば外の世界へ逃げることができる。
でも、もう一度入ればどうなるんだろう？
今までの記憶を残したまま、もう一度あの体験をするのかな？
また滅茶苦茶に犯されて、中出しされる...。
もうあんな経験はしたくないと思いながらも、私はドアを開けて中に入りました。
でも、中は真っ暗で何も見えません。
ガチャリとドアが背後で締まり、本当の暗闇に包まれます。
壁づたいに歩いてゆき、ベッドがある方へ歩こうとした瞬間、床がないことに気付きます。
え？
そのまま足を踏み外し、奈落の底に落ちてゆく感覚に襲われます。
私の記憶はそこで途切れました。

チャプター08 解除音声

私が目覚めるのを待っていたかのように頭の中に女性の声が響きます。
おかえりなさい。
如何でしたか？犯される喜びを堪能できましたか？
今日はここで終わりにしましょう。
また、いつでもこのホテルに来ていただいても構いませんよ、うふふ。
それまでは、いつもの生活に戻れるよう、ここから出るための方法を私がお教えしますね。
さあ、ゆっくり目を閉じて下さい。
そのままイメージして下さいね。

あなたはベッドサイドにおいてある服を来て、この部屋から出てゆきます。
部屋を出ると、そこは先ほど入ってきたドアの外です。
あせらず、ゆっくりと階段を上がってゆきましょう
1 段 1 段ゆっくりと階段を上がってゆきます。
1 段上がるごとに、今までの経験を忘れてゆきますからね。
1 段、2 段、あなたは自分が今までされてきたこと忘れてゆく
3 段、4 段、そこで何をされたのか、記憶が薄れてゆく
5、6、何をされたんだろう？そもそも私はどうしてここにいるんだろう？
7、8、そうだ私は女性になって女性の快感を感じてみたいと思っていたんだ
9、10、そうだよね、私は男だから女の快感を味わってみたいと思っていた
んだよね。
そうですね、あなたは男で少しだけ女性の快感に興味があっただけでした。
ここは地下2階ですから、さらに10段あがりましょう。
1、2、男だから女性の快感に興味があるのは当たり前
3、4、そう、少し興味があっただけ
5、6、男として本当は女性を抱きたいんだよね
7、8、女性と恋愛して男としての喜びを体験したい
9、10、だから今からはそのための時間を過ごそう
いいですね、男としての意識が戻ってきましたね。
では、あと1階分は目をあけて、しっかりと階段を確認しながら登りましょう。
いいですか？
1、2、3、4、5、6、7、8、9、10！
あなたは非常ドアを開けて1階に戻ってきました。
エントランスのドアをくぐり、外の世界に出ます。
一人の男として私は歩いている。
今から何をしてもかまわない。
このまま自宅に帰って休んでもいいし、仕事に戻ってもいい。
今までとおり、男としての生活にもどろう。
この音声を聞く前のように。

本日は当ホテルをご利用頂き、誠にありがとうございました。
またいつでもお越し下さいね。
では、その日が来るまで、ごきげんよう。